

1 今回の予定表

今回 handout では、以下のような疑問に答えを出す：

問1 どういう時に /p/ → [p^h] ?

問2 *rhythm* は、[rið(ə)m] とある。なぜ「発音してもしなくてもいい」母音が入るのか？

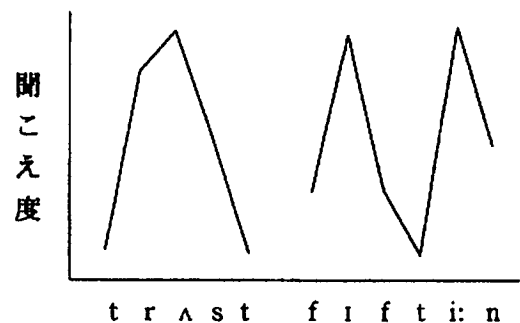
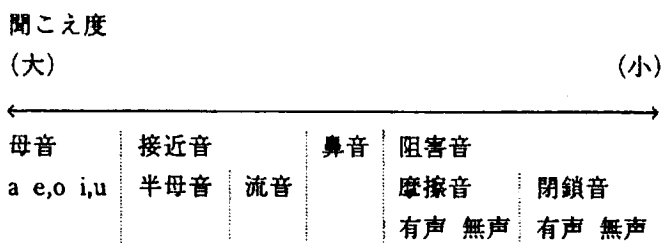
問3 アメリカ人いわく、「日本語の外来語を発音するのは疲れる」

McDonald (3) desk (1)
マクドナルド (6) デスク (3)

なぜ？

2 Syllable

syllable



(図はいずれも、窪蘭 1998: 51 より)

聞こえ度 (sonority): 音の大きさ (聞こえやすさ)

半母音 (semivowel) : w, y

流音 (liquid) : l, r

鼻音 (nasal) : m, n

摩擦音 (fricative) : s, z, ʃ, ʒ, f, v etc.

閉鎖音 (stop) : p, b, t, d, k, g

なお、接近音は approximant、阻害音は obstruent
(母音は vowel)

よくある syllable の解説：

このような「山」のことを syllable と言う。

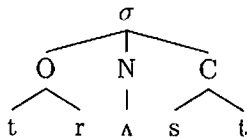
なお、syllable のことを、しばしば σ であらわす。

onset nucleus coda

(それぞれ、左側のふもと、頂上、右側のふもと)¹

¹nucleus は、peak とも言う (sonority における peak だから)。しかし、ここでは nucleus の語を採用。

すると、例えば /trʌst/ という syllable の内部構造は、²



なお、書き言葉の hyphenation と一致するとは限らない

e.g. sym-boli-cal, mono-chrome, inter-na-tion-al

但し、以下に見るように、両者がまったく無関係なわけでもない。

注意：

sonority の山を使って syllable が定義できても、山と山の境界線までは sonority は決めてくれない。境界線は、理論的に（つまり、以下の諸事実をうまく説明できるように）決める。

2.1 有り難味その1：異音規則（問1）

(1) a. pin

b. spin

syllable-initial の /p/ → [p^h]

propose で2番目の p も aspirate（有気化）されるから、prop.ose でなくて pro.pose

辞書の hyphenation が syllabification を反映するケース：pro-pose (cf. Ja-pan vs. Jap-a-nese)

同様に

(2) a. top

b. stop

2.2 有り難味その2：phonotactics（問2）

syllable の分け方：phonotactics

(3) a. A[tʰ]lantic

b. a[tʰ]rocious

[tʰ] is not a possible syllable onset, but [tr] is (Kenstowicz 1994: 251)

[tr] で始まる単語はある (e.g. *truck*)。しかし、[tʰ] で始まる単語は存在しない。[tr] で始まる造語 (e.g. *trive?*) なら、「英語には、たまたま存在しないが、あっても不思議はない」という反応だが、[tʰ] で始まる *tluck* とかいう造語は「英語には存在し得ない単語」という反応。

(4) a. rhythm [rið(ə)m]

b. rhyth.m (syllabic m)

c. rhy.th_l.m (epenthesis による ə の挿入)

²既に phonology を勉強済みの人は、「rhyme はどうなってるんだ？」と思うかも知れません。rhyme については、今回は関係ないので、省略。

[ðm] は possible coda でない

このような場合には

- 1) V の挿入 (epenthesis)
- 2) C の削除 (deletion)

の2通りの対策が可能：この場合には 1)

epenthesis の証拠： rhythmic³

一方、damn の場合には 2); dam.ɸ

underlying /n/ の証拠： dam.nation

さらなる phonotactics の証拠その1：言い間違い (Cipollone et al. 1998: 302)

Intended: Freudian slip

Actual: fleudian shrip

*_σ[fɪ-]

*_σ[sr-]

さらなる phonotactics の証拠その2：反応時間 (O'Grady et al. 1996: 443)

lexical decision task における RT (response time)

pronounceable non-words (e.g. *plib*) > unpronounceable non-words (e.g. *nlib*)

注意：これは脳（言語知識）の話であり、口の話ではない。

英語では、nasal+stop は、coda では OK (e.g. *hand*) だが、onset ではダメ (例えば *nd* で始まる単語はない)。

なお、onset での nasal+stop は、Swahili では OK (e.g. *ndizi* 'banana') (O'Grady et al. 1996: 379)

(*hand* のように、英語話者も、[nd] が「発音できない」わけではないことに注意。)

2.3 矛盾？

英語の phonotactics (onset) : ⁴
$$/s/ + \left\{ \begin{array}{c} /p/ \\ /t/ \\ /k/ \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{c} /r/ \\ /l/ \\ /w/ \\ /y/ \end{array} \right\}$$

strike を、sonority の山で描いてみよう！山は、いくつ？

syllable は sonority では決まってないんじゃないか？

実は、sonority 自体、実質的に何なのかは、よくわからないんだそうな (Ohala 1990)。⁵

sonority に絶対的な位置を与える必然性はない。要するに「syllable というものを想定することによって、何が説明されるのか」という、メリットこそが問題。

(裏を返せば、sonority が物理的にきちんと定義されるものであって、かつそれを元にした定義に矛盾がないとしても、そうやって定義した syllable に特にメリットがないなら、そんなものを想定する必要はない。)

³但し、Selkirk (1982) の p. 90 への n. 9 (p. 130) も見よ。

⁴窪園・太田 (1998: 151) より。

⁵Ohala (1990) は、sonority を元を考えることを批判。

3 では、日本語の phonotactics は？(問3)

日本語には「長母音」と「短母音」の区別がある。さらに、日本語には「長子音」と「短子音」の区別もある。

(5) 肩 (kata)、勝った (katta)

(6) 人 (hito)、ヒット (hitto)

open syllable (開音節) (C)V: さ (sa)、く (ku)、ま (ma)、まー (maa)

closed syllable (閉音節) (C)VC: おん (on)、かん (kan)、きつと (kit.to)

CCV (consonant cluster): きゃ (kya)

McDonald (3音節) が「マクドナルド」(6音節) になり、desk (1音節) が「デスク」(3音節) になる理由：
epenthesis & resyllabification

(7) a. mək.dən.əld → ma.ku.do.na.ru.do

b. desk → de.su.ku

日本語の phonotactics に合うように作り変える。

文献表

Cipollone, N., S. Hartman Keiser, and S. Vasisht (eds.) (1998) *Language Files: Materials for an Introduction to Language & Linguistics*, 7th ed. Columbus: Ohio State University Press.

Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*. Cambridge, MA, and Oxford, UK: Blackwell.

窪田晴夫 (1998) 音声学・音韻論 (日英語対照による英語学演習シリーズ1). 東京: くろしお出版.

O'Grady, W., M. Dobrovolsky, and F. Katamba (1996) *Contemporary Linguistics: An Introduction*. (3rd ed.?) Harlow: Longman.

Ohala, J. J. (1990) Alternatives to the Sonority Hierarchy for Explaining Segmental Sequential Constraints. In Ziolkowski, Michael, Manuela Noske, and Karen Deaton (eds.) *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Volume 2: The Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, pp. 319-338.

Selkirk, E. O. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.